

研究課題	主体的な学び、探究的な学びを実現する研究チームとしての学校づくり
副題	～非認知能力を土台として豊かな学びを生み出す教員の協働的な研究活動の推進～
キーワード	チームとしての学校、同僚性、協働的な研究、非認知能力
学校/団体名	公立松阪市立殿町中学校
所在地	〒515-0073 三重県松阪市殿町 1508 番地 1
ホームページ	https://www.tonomachi-matsusaka.com/tonomachi/

1. 研究の背景

本校は、平成26年より松阪市「教育の情報化」推進事業の指定校に選定され、全国に先駆けて1人1台端末の環境整備がなされてきた。そのため、全教員、生徒ともに1人1台端末の活用を進めており、学校としてもICTを活用した授業の実践研究を積み重ねてきた経緯がある。さらに、令和3年1月には松阪市全体での「松阪市GIGAスクール構想」がスタートし、校内への高速無線ネットワークの整備、特別教室を含むすべての教室への大型モニターの設置が進み、あらゆる授業においてICTを使用することが可能となった。これらの支援により、現在は教員の基本的なICT活用能力および指導能力が身に付いている状況である。2023年度の全国学力・学習状況調査では、90.6%の生徒が「授業においてほぼ毎日ICTを使用した」と回答している。ICTの利活用による主体的な学び、探究的な学びの拡充については課題があったが、2023年度のパナソニック財団実践研究助成による研究強化により改善が見られた。【自己調整的な学び：全国57.5%、本校62%】【総合学習における探究的な学び：全国72.1%、本校90%】

前年度の成果をふまえて、また近年、同僚性の構築による教育の質向上への効果が示唆されていることから、今年度は、学びの質を高める取り組みを継続するとともに、チーム研究の体制を組み、教員の同僚性の構築と研究力の向上を目指すこととした。

2. 研究の目的

本校では、学習指導要領「生きる力」の実施を契機として、教員間で学び合い、協働的に実践研究を行う取り組みを継続してきた。方法としては、第一に、学年部会および各教科部会を基盤として、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて協働的に実践研究を進めてきた。とりわけ教科部会では、共同でのシラバス検討、相互の授業参観による批評、指導と評価の一体化の実践についての検討など、学習指導要領「生きる力」の理念をどのように具体化できるか、実践的に探究してきた。今年度は研究の蓄積および文部科学省答申「令和の日本型学校教育」の内容をふまえ、研究主題を「自他を尊重し、つながり・深め合い、主体的な学びを実践する生徒の育成～個別最適な学びとwell-beingの実現～」と設定した。主題設定の背景には、変化の大きな時代においても、誰一人取り残すことなく、ともにwell-beingを実現できる生徒の育成を目指すという目標があり、目標の達成のためには、教員が協働して探究を進める必要がある。さらに本校では、豊かな学びを持続的に生み出す学校文化を築いていくために、教員が協働的に実践研究を進めることにより同僚性を構築し、研究力を高めることを今年度の研究目的とする。

3. 研究の経過

今年度は、教科部会を研究チームと位置づけ、年間を通じた協働研究の過程をデザインした。

毎月実施している全体研修会の一部に教科部会を設け、継続的に協働の機会を設定した。教科における研究デザインの焦点は、①課題の共有とアプローチの多様性、②効果の検証、③探究成果の教科内共有と全体共有の三点に置いた。また、同僚性構築の土台として、生徒に行っているソーシャルスキルトレーニング（SST）を教員間でも行うことにより、親和的な人間関係の構築を試みた。

本研究の実施にあたり、先進的に実践研究を行っている学校の視察を行った。第一の目的は、教科部会をチームとした実践研究の方法を学ぶことである。研修主任および研修担当教員が教科部会を軸としたチーム研究を継続的にしている先進校を視察した。第二の目的は、各教科の先進的な実践事例を学ぶことである。各教科代表教員が全国研究会や他県の研究会に参加し、先進的な事例を学び、各教科部会および全体に還流した。

（１） 関係性構築のための SST

昨年度より実践しているソーシャルスキルトレーニング（SST）を全体研修会の冒頭に行った。2022 年度より生徒の人間関係を構築する力をつけるために市内の小中学校で SST が全面的に導入されたが、本校ではさらに同僚性の構築を目的として教員を対象に SST を行った。

（２） 研究チームによる研究過程のデザイン

① 研究課題の共有とアプローチの多様性

例年、本校では個人を主体とした実践研究を行ってきた。個々の教員が研究課題により授業デザインを作成し、相互に授業を参観することで実践力の向上をはかっていた。

研究チームを軸とした協働的な研究では、教科部会で共通の研究テーマを決め、個々の教員がテーマをふまえて実践研究を進めることとした。教科で設定するテーマについては、各教科で経験年数や関心、課題となっている事柄が多様であることから、全体では方向を指示せず、自由に設定することとした。

各教科の研究テーマにもとづいて、個々の教員が独自の研究課題を設定した。アプローチについては統一せず、各教員の創意工夫を生かして多様なアプローチを考えることで、互いに学び合いが生まれ、学校全体の実践の豊かさにつながると考えた。

また年間 2 回の授業公開週間を設け、教科部会内で相互に参観し批評することとした。公開授業にあたり、授業デザインを教科部会内で交流し、意見交換を行った。これにより、研究テーマにせまる授業デザインを共同で検討し、デザインを練り上げていくことを意図した。また 2 回の授業公開で参観する教員の組み合わせを変更し、さまざまな視点から授業を検討できるようにした。授業後には、批評や意見をアンケートに記入し、授業者に共有した。

以上の活動における資料の共有や意見の交流については、タブレットのアプリケーションを活用し、クラウド上で行うこととした。

②効果の検証

研究にあたり、実践の効果や生徒の変容を検証するためにデータを用いることを意図した。

効果の測定には、量的なデータと質的なデータのいずれか、または両方を分析して示すことと

した。量的なデータとしては、アンケートの数値や達成率の推移など、質的なデータとしては、生徒の振り返りでの記述や、レポートやプレゼンテーション等の表現を用いること、教科の特性やテーマに応じて、適切なデータを活用することを確認した。

③研究成果の共有

各教員の研究過程や成果は、定期的に設定した教科部会において、他の教員と共有した。

また今年度は、各教科の研究成果を全体で共有する機会を年間2回設定した。まず9月の中間報告会において、各教科のテーマ設定や研究の過程を発表した。2月の最終報告会では、研究成果を共有した。さらに各教科代表が、全国の先進的な実践を学び還流する機会を設けた。代表は、教科部会において学んだ内容を還流するとともに、全体研修会で研修報告を行うこととした。

◆年間の研究過程

※全体研修会の冒頭10分間でSSTを実施した。

時期	内容	取り組み	評価のための記録
4月10日	全体研修会	講演会「学級づくりについて」 講師：前田豊美先生（松阪市教育委員会）	
	教科部会①	シラバスの共同検討	
5月29日	全体研修会	全体研修テーマの共有	
	教科部会②	教科研究テーマの設定、各教員の個人テーマの共有、授業アイデアの共有	実践研究アンケート①（教員） 教科目標設定シート
6月12日	全体研修会	ワークショップ「クエスチョン・エクス ～自ら問いをつくり、問いをもって世界を 眺めよう～」 講師：佐藤大河先生（教育と探求舎）	
	教科部会③	授業デザインシート共有	
6月17日 ～7月19日	授業公開週間①	授業デザイン検討、授業の相互参観	授業振り返りアンケート（教員）
7月中旬	生活学習 アンケート①	全校生徒の生活、学習状況、意識の把握	アンケート調査①（生徒）
夏季休業	教科部会④	第1回授業公開週間振り返り 中間報告への準備 生活学習アンケート（生徒による授業評価） の分析をふまえた成果と課題の共有 全国学力学習状況調査、みえスタディチェ ック、松阪市標準学力調査の分析	
	個人研究	第2回授業公開に向けた課題設定 授業デザインシートの作成	
9月11日	全体研修会	教科研究中間報告会	
	教科部会⑤	第2回授業公開週間に向けて 新たな課題、方法の共有	
9月30日 ～10月18日	授業公開週間②	授業デザイン検討、授業の相互参観	授業振り返りアンケート（教員）
11月13日	教科部会⑥	成果の検証方法の検討	
12月11日	全体研修会	先進校視察 還流報告	
	教科部会⑦	最終報告会に向けた準備	実践研究アンケート②（教員）
12月中旬	生活学習 アンケート②	全校生徒の生活、学習状況、意識の把握	アンケート調査②（生徒）
2月19日	全体研修会	教科研究最終報告会	実践研究アンケート③（教員）
3月12日	全体研修会	1年間の研究の振り返り	研究のまとめ（教員）
	教科部会	次年度のシラバス、教科書検討	

【先進校視察、研究会参加】

＜教科研究＞

岐阜市立陽南中学校、福井大学教育学部附属義務教育学校、第17回国語教育研究大会、第60回国図工・美術教育研究大会、第11回名古屋市学校体育研究会全国発表会、「こころのスキルアップ教育」名古屋ワークショップ2024、第18回北の教育文化フェスティバル

＜総合学習＞

岐阜市立陽南中学校、松阪市立飯南中学校、松阪市立東部中学校、松阪市立三雲中学校

4. 代表的な実践

(1) 親和的な同僚性の構築 —SSTの実施—

毎月の全体研修会冒頭の10分間をSSTタイムと位置づけ、教員間の相互理解と親和性の向上を目指して、生徒と同様のプログラムを行った。(写真1) 各回でグループのメンバーが入れ替わるように設定し、学年や教科、年齢の異なるさまざまな教員が相互に交流できる機会とした。



写真1

(2) 先進校視察による研究の強化

① 先進校の視察による研究体制づくり

教科部会をチームとした研究を推進するにあたって、本校と地域の特性や学校規模が近く、教科部会を中心とした研究体制が確立している岐阜市立陽南中学校を視察校として選定した。

まず研修部会で陽南中学校ホームページに公開されていた教科部会による研究資料を参照し、年度末の教科研究最終報告会をゴールとした研究計画を作成した。また各教科部会の研究においても資料を参照し、研究の進め方の見通しを立てることとした。さらに研修主任および教科代表が陽南中学校研究発表会に参加し、実践研究の方法について全体および教科部会へ還流した。

また、本校が探究的な学びの集大成として位置づけている総合学習についても、先進的に実践を行っている陽南中学校の取り組みを参照した。陽南中学校の総合学習「とびら」は、学校組織全体をチームとした包括的なカリキュラムや、中学校教育3年間を見通した発展的なプログラムが特徴である。本校の総合学習のカリキュラムを、学校組織全体、3年間の学校教育を見通したものに修正するとともに、総合部会教員が視察に訪問し、成果発表の方法や準備の取り組みについて学んだことを校内で共有した。

② 先進的な事例視察による実践研究の強化

今年度は各教科部会代表を県外研修へ派遣し、全国的な実践研究の潮流や先進的な実践事例を学び、教科部会へ還流する取り組みを実施した。前年度の社会科、英語科の県外研修に加え、今年度は全ての教科部会代表が県外の研究会や全国研究会に参加し、実践に関する新たな知見を得て教科部会および全体に還流した。異なる地域や教員の実践に実際にふれて刺激を受けるとともに、本校の実践研究の充実や、ICTの利活用の進展度合いを見直す良い機会ともなった。

(3) チーム研究による同僚性の構築

【4月】教科部会における研究テーマの設定

今年度の研修テーマ「自他を尊重し、つながり・深め合い、主体的な学びを実践する生徒の育

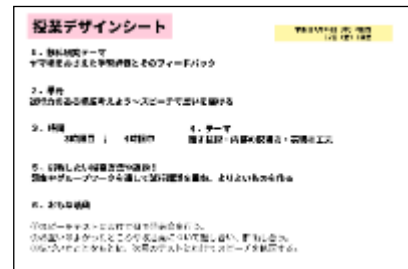
成～個別最適な学びを well-being の実現に向けて～」をふまえて、教科の特性や課題、関心によって自由に研究テーマを設定できることとした。

各教科部会の研究テーマは以下の通りである。

国語	ヤマ場をおさえた学習評価とフィードバック&指導と評価の一体化
数学	主体的に学ぶ態度を育てよう
理科	理科好きの生徒を増やす!!!
社会	資料を通じて生徒の身近な課題にせまる探究「自分ごとになる学び！」
英語	生徒が主体的に取り組める言語活動の充実～四技能横断型の授業を目指して～
音楽/美術	たくさんの芸術にふれよう
体育	ICT 機器を活用し、生徒のより良い「学び」をデザインしよう
技術/家庭	自己調整学習で、自ら学ぶ力を育成する
特別支援	生活していく上で必要な力や学力を個々の特性に合わせて身につけさせていく
国際教室	日本語で自分の意見、気持ちを言える

【5月】授業デザインの作成

第1回授業公開週間に向けて、研究テーマをもとに作成した各教員の授業デザインを教科部会において共同で検討した。授業デザインシートは簡易にし、授業の意図と方法を共有することに主眼を置いた。これにより、授業公開の準備負担を軽減するとともに、教員が指導案にとらわれず、授業の目的に沿いつつ、目の前の生徒の状況によって柔軟に展開を修正することを目指した。授業デザインシートは、クラウド上に共有し、全ての教員が閲覧できるようにした。



【6月】第1回授業公開週間

第1回授業公開週間では、すべての教員が教科内で相互に授業を公開した。公開時期を広く設定することで、教員が挑戦する課題、単元を選択できる幅を広げ、相互の参観日程も調整ができるようにした。参観によって得た学びは、アンケートに記入し教科内で共有した。

【夏季休業中】教科部会による研究

夏季休業中の全体研修会を教科部会に置き換え、教科研究を行った。第1回授業公開の振り返りを共有し、成果と課題を検討した。また、7月に実施した生徒アンケートの結果をふまえて、これまでの実践を振り返り、9月以降の実践のプランを練った。またこれらの研究経過をまとめ、9月の中間報告会に向けて準備を行った。教科部会では、例年にまして熱のこもった対話が見られるようになった。(写真2)



写真2

【9月】教科研究中間報告会

全体研修会において各教科研究の中間報告会を行った。各部会の課題意識や、研究テーマ、教

科独自のアプローチなど、他教科の研究経過を聞くことで、新たな学びや授業改善への刺激を得ることができた。さらに、第2回授業公開に向けて、新たな手立てを協働で検討した。

【10月】第2回授業公開週間

第1回授業公開の振り返りをふまえて各教員が新たに授業デザインを作成し、実践を公開した。今回は参観する教員を変えて相互に公開を行った。第1回と同様にクラウド上で授業へのコメントを共有した。

【11月】効果検証方法の検討

全体研修会において、実践の効果検証の方法について確認した後、教科部会に分かれてデータのとり方について検討した。教科、またテーマによって検証に必要なデータが異なるため、どのようなデータが必要か、またどのような方法でデータを収集するかについて各教科部会で話し合った。(図1)



図1

【2月】教科研究最終報告会

最終報告では、データを用いた成果の分析を共有し、1年間の挑戦によって得た学びを全体へ還元した。各教科がチームとして、研究のサイクルに沿って協働的に授業研究を行ったことで、研究のプロセスを個々が実践的に習得するとともに、異なる教科の課題やアプローチから学び、実践を多角的に研究する視点を獲得することができた。



写真3

5. 研究の成果

(1) 教員の研究力の向上

教科部会をチームとして継続的に研究を推進することにより、教員の研究に対する主体性、協働性が向上した。

これまで教科部会において授業研究の交流は行っていたが、チームで共通の研究テーマを設定して、協働的に探究を行うという方法は今回が初めてであった。また全体研修会の一部を教科部会に充てて定期的に協働する機会を設けた。

この二点によって、より深い対話が可能となり、自らの実践を見直し改善する動機となったと考えられる。

授業に「主体的な学び」を取り入れた教員は100%となり、年度当初から17ポイント増加した。(表1) 一方、「探究的な学び」を取り入れた教員は70%であった。実践に困難を感じる教

「主体的な学び」を実現する活動を取り入れた。

	1	2
2024年5月	29%	54%
2025年2月	54%	46%

1:あてはまる 2:どちらかといえばあてはまる

表1

員も一定数おり、さらに継続した研究が必要である。(表2)

創造的な授業デザインの実施については、単元を見通した授業計画を作成し実践を行った教員が81%となり、カリキュラムマネジメントの意識が定着しつつあることがうかがえる。(表3) また、教育理論や実践について学んだことを自らの実践に生かした教員は100%であり、主体的、創造的に授業改善を行う姿勢が広がった。(表4)

自ら学びを求める教員の割合、および、自ら課題を設定し研究する割合も増加している。自ら研修会に参加する、書籍を読む、他の先生の話聞くなど学習の機会を持った教員は72%から84%に増加した。今年度の研究において新たな課題や方法に挑戦した教員の割合は100%であった。教員の感想からは、チーム研究のスタイルが個々の研究の進展に寄与した様子が伺える。

「探究的な学び」を実現する活動を取り入れた。

	1	2
2024年5月	7%	46%
2025年2月	35%	35%

表2

単元でつきたい力を見通した授業計画をし、実践を行った。

	1	2
2024年5月	14%	61%
2025年2月	27%	54%

表3

教育の理論、研修、他の先生の授業などから学んだことを、自分の実践に生かした。

	1	2
2024年5月	18%	46%
2025年2月	46%	54%

表4

【教員の感想】

- ・教科の方針や自分たちの実践をシェアする時間があることで、客観的に自分の授業をブラッシュアップしていくことができた。来年度さらに試したいことも出てきたので、今年度の成果と課題をしっかりと活かした授業デザインに取り組んでいきたい。
- ・同じテーマで取り組んだことにより、普段より話し合いが深まったり、得たりするものが多かったように思います。また、他教科の授業方法等も参考になりました。
- ・教科ごとの特性や課題を知ることができてよかった。それぞれの強みや課題を教科を越えて共有し、話し合うことで学校全体の授業改善に繋がると思います。

(2) 生徒の学びの質の向上

生徒の学びの質の向上について、生徒の意識を調査するために、アンケートを実施した。

全体として各教科の授業が楽しいと回答した生徒は平均85%であり、授業に対する満足度が高い状況が伺えた。一方で、生徒が実感した学びの質の向上は緩やかであった。

第一に、授業に集中して取り組んだと回答した生徒は、昨年度の92%に対して、95%であった。(表1) 第二に、主体的に学びを深めた生徒は、前年度の83%に対して89%であった。

(表2) 第三に、学習でわからなかった点を次の学習につなげたと回答した生徒は前年度の85%に対して86%であった。(表3) いずれもわずかな増加であったが、「あてはまる」と回答した生徒の割合が増加しているため、一定程度、取り組みの成果があったと考えられる。

授業に集中して取り組んでいる。

	1	2
2024年1月	47%	45%
2025年1月	54%	41%

表1

わからないことがあった時には質問したり、自分で調べたりしている。

	1	2
2024年1月	32%	51%
2025年1月	49%	40%

表2

学習について、わかった点やよくわからなかった点を見直し、次の学習につなげることができた。(2年生)

	1	2
2024年1月	29%	56%
2025年1月	34%	52%

表3

また、今年度は総合学習において、「探究的な学び」を拡充するために、先進校の事例を参照し、カリキュラムを修正して実施した。結果として総合学習において「探究的な学び」を行ったと回答した生徒が前年度の88%に対して、96%に増加した。

(表4) このことは、カリキュラムに「課題設定」「研究計画」「実地調査」を明確に取り入れ、探究のプロセスを生徒が実感できる内容へと改善したことが要因と考えられる。また、今年度は地域とつながり、地域で活動する方々との出会い学習を含む内容となったため、地域の良さを知り、地域を支える人の存在に関心を深めた生徒が多かったことも重要な成果であった。以下が、生徒の振り返りにおける感想の抜粋である。

総合的な学習の時間では、自分たちで課題を立てて、調査を計画する活動に取り組んだ。(2年生)

	1	2
2024年1月	53%	35%
2025年1月	55%	41%

表4

【生徒の感想】

- ・昔からの文化を食の観点でも大切にされていて、その文化が長く愛されるように様々な人がたくさんの工夫をされていると思った。また、インタビューや実地調査などに協力して下さった、牧場やお店の方が私たちに親切にしてくださったことも松阪の人の良さだと思った。
- ・人について初めは松浦武四郎さんとか蒲生氏郷さんなど偉人しか思い浮かばなかったけれど、調べていくにつれて、食べ物や売っている人たちが、市長などたくさんの人が関わっているのだと気づくことができた。
- ・はじめは松阪市のことは松阪に住んでいるので全部わかって思っていたら、このおもてなしプロジェクトをしているうちに全然松阪市のことを知らないことを知ったので、もっと松阪市のことを知りたいと思いました。

6. 今後の課題・展望

今後は、同僚性を大切にした教科研究を土台として、より研究の質を高め、効果的に生徒の学びの質を向上させることが課題であると言える。チーム研究を軌道に載せ、より深い探究を可能にするためには、研修担当がさらに協働的な研究に関する学びを深め、よりよい方法を開発する必要がある。教員の研究への意欲を、質の高い学びを実現できたという達成感や、研究のやりがいにつながるために、戦略的に研修計画を練っていききたい。

7. おわりに

今年度、本校は「生徒の学びの充実」というビジョンを共有しながら、互いの実践から学び合い、ともに解決に取り組むことで、同僚性を構築してきた。教員がともに成長する研究の過程は、生徒が互いに学び合い成長する過程と同型であり、学校を一つのチームへと導くこの豊かな関係性こそが今回の研究で得た最も重要な収穫であったと思う。

最後に、本研究の推進にあたり、松阪市教育委員会、松阪市子ども支援研究センターをはじめ視察を受け入れていただいた学校の皆様、研究会の皆様、地域の皆様、地域を支える企業や団体の皆様に多大なご支援をいただいた。あらためて感謝申し上げたい。

8. 参考文献

- ・紅林信幸(2007)「協働の同僚性としての《チーム》: 学校臨床社会学から」『教育学研究』
- ・文部科学省(令和4年)「今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開(中学校編)」
- ・文部科学省 国立教育政策研究所 教育課程研究センター(令和2年)「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校 総合的な学習の時間」